２０２４年度

愛知の社会科教育

（第56集）

目次

Ⅰ　はじめに 1
Ⅱ　教育研究愛知県集会 2
　１　小学校分科会
　２　中学校分科会
Ⅲ　本年度の研究内容 4
　小学校第４学年における実践例
　中学校第１学年における実践例

愛知教職員組合連合会　教育課程研究委員会社会科部会

２０２４年度　教育課程研究委員

◎部長　○副部長

ブロック推せん

名古屋			尾張			三河		
名前	単組	学校名	名前	単組	学校名	名前	単組	学校名
◎矢吹　隆	名古屋	南光中	浮田　勇次	小牧	小牧小	清水　裕司	幸田	南部中
小池　良亮	名古屋	平和が丘小	吉田　真由美	稲沢	治郎丸中	荻野　達成	豊橋	本郷中

第71～73次教育研究全国集会リポート提出者

71次			72次			73次		
名前	単組	学校名	名前	単組	学校名	名前	単組	学校名
中西　悠○	岡崎	矢作北中	湊　悠希	名古屋	大須小	中森　正純	豊川	小坂井中
野口哲平○	名古屋	志段味中	河本　晋也	春日井	西部中	加藤　優太	名古屋	沢上中

第74次教育研究全国集会　リポート提出者　　林　翔太　（豊川・豊川小）

加藤　輝夫　（名古屋・上社中）

Ⅰ　はじめに

教育課程編成活動について

(1) 教育課程編成にあたっての基本的な考え

本文科会では、言語活動の充実をはかりながら、「ゆたかな学び」のある社会科教育のあり方や、学習課題を工夫することで見方・考え方を働かせ、子どもたちが主体的に取り組む授業実践の手だてを追究してきた。そして、教育課程編成については、次の点を考慮した。

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○「基礎・基本」
　必要な語句や表現、技能などは、「どの子どもにも必要な学力」である。社会科では、資料を読み取り、それらを根拠にして自分の考えを形成し、それらを表現する学習活動を行うことである。

○「生きてはたらく力」
　学んだことを日常生活にいかす「活用する学力」である。社会科では、話合いを通してさまざまな意見にふれ、自他の意見を尊重しながら合意形成をはかる学習活動を通して、自他の意見を尊重する態度を養うことである。
　また、社会科の学習において「わかる授業・楽しい授業」を実現させていくためには、教材化の工夫や、学習活動の工夫、学習過程の工夫を教育課程に位置づけ、系統的に指導していく必要がある。そして、子どもの興味・関心を高め、主体的・対話的な活動を通して、子どもたちが知的に楽しいと思える「ゆたかな学び」ができるようにすることが大切である。

(2) 小・中学校における「ゆたかな学び」のポイント

「ゆたかな学び」を育んでいくために、小・中学校における学びのポイントに沿って、実践を行った。

		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
小学校	中	地域の人々の生活や産業の仕組みを通して、社会生活について理解し、見学・調査したり、地図資料で調べたりして、まとめる。	地域の人々が行うことや産業の果たす役割を考え、その課題を把握して、解決にむけて、解決策を表現する。	よりよい社会を考え、学習したことを社会生活に生かそうとする。
	高	地理的環境や社会の仕組み、地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して社会生活について理解し、さまざまな資料や調査活動を通して情報を適切に調べ、まとめる。	社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考え、社会に見られる課題を把握して、その解決にむけて社会へのかかわり方を選択・判断したことを適切に表現する。	多角的な思考や理解を通して、よりよい社会を考え、主体的に問題解決しようとする。
中学校		国土と歴史、現代の政治、経済、国際関係等に関して理解し、調査や諸資料からさまざまな情報を効果的に調べ、まとめる。	社会的事象の意味や意義，特色や相互の関連を多面的・多角的に考察し、社会に見られる課題の解決にむけて思考・判断したことを説明したり，議論したりする。	多角的な思考や理解を通して社会的事象について、国家及び社会の担い手として、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする。

Ⅱ　教育研究愛知県集会

１　小学校分科会

(1)　全体を通して

本年度は、県内１９本のリポートが報告され、歴史・公民、国土・産業学習、地域学習の分野ごとに討論を行った。各分野の討論では、それぞれの実践にもとづいて活発に意見が交流され、熱心な議論が行われた。それぞれの分野で地域教材を開発し、ゲストティーチャーによって学びを深める実践や、思考ツールや ICT 機器を有効に活用しながら課題を追究する実践などが報告され、それらの有効性が確認された。総括討論では、「現在求められている社会科学習における教員の役割」と「子どもを中心に据えた社会科学習とは何か」について、参加者より活発な議論が行われた。

(2)　討論の内容

①　歴史・公民学習

討論では、「先人の働きや政治の役割を、切実感をもって追究できる学習活動の工夫と育てたい力」について話し合われた。ゲストティーチャーや身近な人の思いにふれながら追究し、現状をリアルにつかませていくことが切実感につながることが確認された。一方で、歴史はリアルでは見られないため、問いや課題との出会わせ方を工夫することで、子どもが疑問をもち、学びたいという思いを高めていくことが切実感につながるという意見も出された。助言者からは、各単組でゲストティーチャーのリストを作り共有するしくみを整えるとよいとの助言を得た。

②　国土・産業学習

討論では、「よりよい社会実現をめざしながら、対話的な学習活動をすすめるにあたって、どのような課題設定をするべきか」について話し合われた。子どもたちの家庭環境や生活経験が違う中で、同じ話し合いの土台にのせるために共通認識をもたせたり、焦点化させたりすることの重要性が確認された。また、多角的・多面的な見方を広げるために、社会構造や時代背景を意識させた対話や立場を明確にしての対話などの有効性も確認された。助言者からは、ゲストティーチャーと対話する際に、教えてもらうという関係性ではなく、ときにはともに考えるという対等な関係での対話も重要であるとの助言を得た。

③　地域学習

討論では、「地域素材を教材化するときの留意点とは何か」について話し合われた。さまざまな立場の人が住んでいることを意識させ、地域の様子を多角的・多面的に捉えていくことの重要性が確認された。その上で、自分自身も社会の一員であるという自覚をもたせていくことが、主体的に社会参画することにつながっていくだろうという意見が出された。また、自分たちで課題を見つけ、力を合わせて解決していく経験が将来的に社会に参画する力になってくるという意見が出され、助言者からも社会に対して意思表明していくことが重要であるという助言を得た。

(3)　今後に残された課題

①　子どもを中心にすえた学びの展開方法と教員の役割

②　社会科における個別最適な学びと協働的な学びのあり方

③　主体的な社会参画意識をどのように育てていくか

2　中学校分科会

(1)　全体を通して

昨今の目まぐるしく変化する世界の情勢を鑑み、子どもたちにとって本当に必要な力とは何か、またそのためには何が必要なのか考え続けることの重要度が増してきている。県内十六本のリポート報告をもとに本年度もテーマを四本柱とし、地理・歴史・公民のそれぞれの分野でどのような実践を行うべきなのか積極的な議論が展開された。その中には身近な地域の事象を通して課題や疑問を見つけ、よりよい社会づくりにむけて子どもが主体的に取り組み社会認識を深める実践が多く見られ、社会科教育を通してどのような子どもたちを育てたいのか、そのための教員の役割は何か話し合われた。

(2)　討論の内容

①　子どもたちが主体的に取り組む学習活動のあり方

討論では、子どもたちの社会に対する認識とのズレを利用した課題設定や地域素材の活用などにより、学びを自分事として捉えさせる工夫が意見交換された。また振り返り活動によって自身の考えの変化を感じとらせたり、問いをいかして授業を展開したりすることで主体的な学習活動を続けさせられることが確認された。そして、主体的に学んだ結果、社会科の目標に迫ることが重要であると再確認された。

②　見方・考え方を働かせる対話的な学びのあり方

討論では、対話的な学びが充実するためには、答えを一つに絞らない課題を設定し､多面的･多角的な見方を働かせて参加させることの重要性などが話し合われた。そのために根拠となる知識を習得するための時間を確保することや、見方・考え方を働かせられるようになるための長期的な指導計画の必要性が確認された。

③　主権者として社会参画の意欲を高める学習活動のあり方

討論では、社会参画という言葉の定義が確認され、そのための能力や資質をいかに育むかが話し合われた。地域素材を活用したり、社会事象とのつながりを実感させたりすることで社会が抱える課題について考える経験を積ませやすくなるだろうという意見が出された。その学習活動を通して社会への認識を深めていくことが子どもの社会参画への自信にもつながるであろうと討論が展開された。

④　地域素材から社会に対する見方・考え方をどう働かせるか

討論では、地域素材を扱うことのメリットとして、自分事として捉えさせやすいこと、第一次資料との物理的な距離の短さ、郷土愛の醸成などがあげられた。デメリットとしては、扱った地域への社会認識しか深まらない危険性、歴史学習においては資料の少なさなどがあげられた。そのため教員は地域素材を教材化することでどのような子どもを育てたいのか明確にし、地域素材で得られた認識を汎用性のある一般化された社会認識にするための手だてを講じる必要性が確認された。

(3)　今後に残された課題

①　二択の問題に対して、AIではなく人間にしかできない第三の選択を考えることができる生徒の育成

②　社会問題の解決の道筋がわかる子どもたちを育成するための社会科学習

③　子ども主体の授業実践をどのように常態化させるか

Ⅲ　本年度の研究内容

【小学校第４学年における実践例】

社会的事象を身近に捉え、夢中になって学ぶ子どもの育成

１　主題設定の理由

私は、子どもが楽しく授業に取り組み、社会的事象を自分事として捉え、追究する姿勢を身につけてほしい。そのために、学習に対して自分の考えをもち、深めることのできる授業を行っていきたい。

本学級の子どもの中には、「社会が好き」と答える子どもが多く見られる。その理由を聞くと「暗記をしたらテストでいい点数が取れるから」という回答が多く、その場だけの知識にとどまっていた。これは、知識の定着が中心になっており、学習問題に対して自らの学習目標をもち、「こうしていきたい」と自分の学びをすすめることができていないためであると考える。そこで、社会と自分とのつながりを意識し、自分がどのように社会に関わっていくべきかを考えることができるように、自己選択・自己決定をしながらとことん調査し、さまざまな人と共有しながら、自分の考えを深めていくことが大切であると考えた。これらの活動に重点を置くことで、子どもは社会的事象を身近に捉え、夢中になって学ぶと考え、実践を行った。なお、実践に当たってはキャリア教育の視点を取り入れた。

目指す子どもの姿
社会的事象を身近に捉え、夢中になって学ぶ子ども

２　ゆたかな学びのための手だて

(1)　対象　４年１組　２０人

(2)　ゆたかな学びのための手だて

手だて１　現代の社会の実態を捉える学習活動の工夫

本単元では、ごみ分別ゲームやエコパルなごやでの学習を学級全体で行った後、子どもの興味・関心に応じて、より「知りたい」と思うことを自己選択・自己決定し、調べ学習を行う。その際、調べる内容・方法は個々で計画を立て、子どもが自らの学習を調整しながら調べることができるようにする。この活動により、知識の定着だけではなく、学習目標をもち、自分の学びをすすめることができるようにする。

手だて２　これからの社会のあり方を考える学習活動の工夫

自分で調べた情報を、友だち、家族、環境事業所の方などさまざまな人と共有する場面を設定し、違う視点からの考えを取り入れる活動を行う。立場の異なる人と話し合うことで、新たな視点に気付き、学習問題を自分事として捉え、社会のあり方について考えられるようにする。何度も繰り返し、さまざまな形で獲得した情報を整理して、話し合うことで、自分の考えが深まり、より身近にこれからの社会のあり方を考えることができるようにする。

３　実践計画

(1)　実践単元　ごみの処理と利用（１６時間完了）

(2)　単元の目標

ごみと資源を処理する事業は、衛生的な処理や資源の有効利用のためにすすめられていることや、地域の人々の衛生的な生活環境の維持と向上に役立っていることを理解し、自分たちにできることを考え、適切に表現している。

(3)　指導計画

段階	時数	学習活動	キャリア教育
つかむ	① ②	**課題と向き合う** 〇資料を見る。 〇ごみの分別体験をする。 【予想される子どもの反応】 ・ごみにはたくさんの種類がある。 ・ごみの片付けは誰が?ごみの行方は? ・自分たちの知らないところで努力や工夫がされている。 ・自分たちの知らないところで努力や工夫がされている。 【学習問題】 たくさんのごみと資源は、誰が、どのようにして処理しているのだろう。 ・エコパルなごやへ行く。	むきあうちから むきあうちから
調べる	③	**学習計画を立てる** 〇「処理の仕組み」「働く人々の工夫」「処理された後の行方」に分類し、調べる視点ごとのプロジェクトに分かれる。 A 処理の仕組み（ごみ）　D 処理の仕組み（資源） B はたらく人々の工夫（ごみ）　E はたらく人々の工夫（資源） C 処理された後の行方（ごみ）　F 処理された後の行方（資源）	むきあうちから つたえるちから
	④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧	**ごみと資源を処理する工夫について調べる** 〇個別→チームで共有→個別学習を進める。 〇学習問題を意識しながら、1時間の学習を振り返る。 〇分からないことが出てきた場合は、環境事業所やはさい工場の方に連絡を取る。 〇次時の計画を立てる。	やりぬくちから つたえるちから
まとめる	⑨ ⑩ ⑪	**学習問題についてまとめる** 〇分かったことを各チームで発表し合う。 〇学習問題についてまとめる。 〇他の学年にも知ってもらうために標語カルタ・すごろく・劇で伝える。	むきあうちから
いかす	⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯	【プロジェクトのゴール】 最終処分場の寿命を一年でも長くしよう。 **ごみと資源の現状とこれからについて考える** 〇自分はこうありたい!宣言をする。 【社会の知識+ゴールに向かうプロジェクト】 ・コンビニで袋をもらわない　・給食の食べ残しをしない ・ごみの分別をする　・スーパーに行く回数を減らす ・外食に行くとき食べ残さない　・ごみを出さない生活をする 〇「実践取り組み表」（2週間分）を作成する。 家族で取り組んだ実践を学級で報告する。	やりぬくちから つたえるちから やりぬくちから

4　実践の様子

つかむ段階（第１時～第２時）

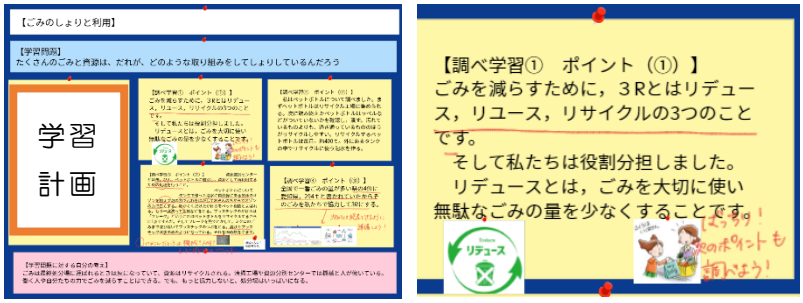
【資料１：分別体験の様子】

まず、ごみ非常事態宣言のグラフや、給食の残飯の写真など、あらゆる資料を提示した。さらに、カードを使ってごみ分別体験を行った。【資料１】すると、「自分たちはごみのことが分かっていない」「もっとごみについて知りたい！」という思いをもつことがで

きた。エコパルなごやでごみについて学び、より詳しく調べたいという意欲をもって、学習をすすめることができた。A 児は「いつも普通にごみを捨てるし、意識していなかったけどもっとごみについて知りたくなった」と意欲をもつことができた。

調べる段階（第３時～第８時）

手だて①自分の知りたいことや問いから、学習計画を立てることによって、解決するためには何を調べる必要があるかを理解しながらすすめることができた。【資料２】子どもが自らの学習を調整しながら調べることができるように、タブレット端末と１枚ポートフォリオを活用した。教員は毎時間子どもの提出したものにコメントを書き込み、支援した。授業の終わりには今日の学びを友だちと共有し、わからないことがあると「次の時間は、今ある疑問を解決する時間にする！」と、次時の見通しをもつことができた。



【資料２：タブレットでの調べ学習】

手だて②A 児は、調べ学習をすすめる中で、「はたらく人の気持ちが本にはあまり書いていないから直接聞いてみたい」と考え、環境事業所の方ともメールのやり取りをすることができた。「本やインターネットもいいけど、直接話を聞けるのがすごくよかった！」と、とても満足そうにしていた。しかし、教えてもらうことが中心で、受け身になってしまった。

学習問題の答えを学級で出した後、保護者にも協力してもらい、どんなことを学習して、どのような疑問が残っているかを家でも話し合ってもらうことができた。「今までお菓子のフィルムとかを資源袋に入れていたけど、これは燃えるごみだということが分かったので、家でもう一度分別について話し合った」「残飯が出ないように買い物の工夫をしていることを教えてもらった」など、家庭と協力しながら子どもの学習を支えることができた。

教員の指示がなくても、子どもは自分たちの力で学習をすすめることができていた。しかし、「もう少しじっくりと一人で取り組みたい」という子どもの姿もあった。

まとめる段階（第９時～第１１時）

各チームで紙芝居やクイズ、劇で発表を行った。その後、小グループを作り、話し合いをした。【資料３】すると、ごみと資源は処理の流れが違っても、はたらく人々や機械の工夫が共通していることに気付くことができた。

【資料３：話し合い活動の様子】

学習問題に対する答えを記述させると、多くの子どもが【資料４】のように、ごみと資源の処理をする事業の大切さと、自分たちにできることを考え記述することができた。

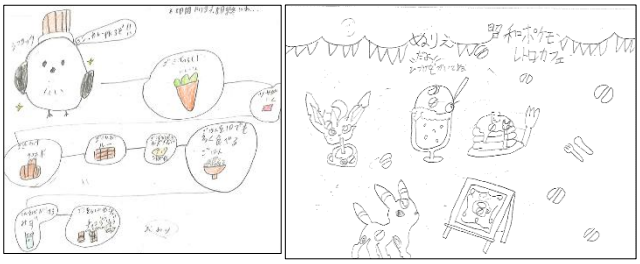
> ごみは最終処分場に運ばれるときは灰になっていて、資源はリサイクルされる。清掃工場や資源分別センターでは機械と人が働いている。働く人や自分たちの力でごみを減らすことはできる。でも、もっと協力しないと、処分場はいっぱいになる。　　【資料４：学習問題についての記述】

しかし、A 児は社会的事象を身近に捉え、「どれだけはたらく人ががんばっても、最

終処分場は２０年でいっぱいになってしまう」ということに危機感を感じていた。学級でも話し合い、自分たちも何かできることはないかと探し、「少しでも最終処分場の寿命を延ばしたい」という新たな学習問題ができた。

いかす段階（第１２時～第１６時）

「最終処分場の寿命を１年でも延ばすために自分たちができること」を各自で考え、「実践取り組み表」を作成した。【資料５】夏休み中に、各自実践を行い、夏休み明けに成果を発表した。その中には「家族みんなで取り組んだ」「家庭のごみを少なくすることができた」と、目標を達成することができた子どもがほとんどであった。そして、「一人でも意識したら変われたから、みんなでやれば絶対に処分場の寿命はのびる！」と社会の学習だけではなく学校を巻き込みながら学習が続いた。



【資料５：子どもが考えた、やる気の出る取り組み表】

５　成果と課題（成果：○、課題：●）

手だて１　現代の社会の実態を捉える学習活動の工夫

○　子どもが、より「知りたい」と思うことを自己選択・自己決定し、調べ学習を行ったことで、知識の定着だけではなく、学習目標をもち、夢中になって自分の学びをすすめることができた。

●　チームで学習をすすめたが、一人でじっくり考えたい人もいたため、チーム学習か一人で学習かを選ぶことができるような工夫をするとよかった。

手だて２　これからの社会のあり方を考える学習活動の工夫

○　自分で調べた情報を、友だち、家族、環境事業所の方と共有し、違う視点からの考えを取り入れたことによって、自分の考えが深まり、より身近にこれからの社会のあり方を考えることができた。

●　環境事業所の方に質問はできたが、どちらかというと受け身になってしまった。最後は、環境事業所の方に提案できるような工夫をするとよかった。

６　今後にむけて

本研究では、すすんで必要な知識を獲得して「現代の社会の実態を捉える」ことと、さまざまな人とかかわりながら自分の考えを深めていく「これからの社会のあり方を考える」ことに重点を置いて実践をすすめた。調べる内容や方法を自らの興味・関心に応じて自己選択・自己決定して学習を調整してすすめることができるようにしたり、助言や必要な資料の提供をしたりすることで、子どもは必要な知識を獲得することができていた。また、個々で調べたことを友だちや保護者、環境事業所の方と共有するとき間を大切にすることで、これからの社会のあり方を考えることができた。自己選択・自己決定をしながらとことん調査し、さまざまな人と共有しながら、自分の考えを深めていくことで、子どもは社会的事象を身近に捉え、夢中になって学ぶことができた。一方で、目標設定が子どもによって多岐にわたったため、明確な基準を設ける必要があることが明らかとなった。座標軸などの思考ツールを活用しながら、情報を共有できるような工夫をしていきたい。今後も、子どもの生活経験をふまえて社会的事象について多角的に捉えることができるように教材研究を行い、社会がどうなっていくとよいかを夢中になって学ぶ子どもが育つような実践を続けていきたい。

【中学校第１学年における実践例】

探究心をもって社会認識を深めていく生徒の育成

１　主題設定の理由

本学年の生徒たちは、授業内での反応もよく、社会的事象について疑問をもったり、知りたいという思いをもったりする様子がよく見られ、社会的事象への興味関心が高い。その一方で、疑問や投げかけられた課題についてねばり強く考えることをせず、すぐに答えを求める傾向にある。これまでの学習においても、多面的・多角的な視点で物事を捉えることが難しく、一面的な見方で思考を止めてしまうことも少なくなかった。日常生活でもインターネットや SNS を通じて瞬時に答えを得られる環境に慣れた生徒たちは、深く考え抜く過程を経験する機会が少なくなっていることが背景にあると考えた。一方で、複雑化する現代社会においては、単純な答えに頼ることなく、自らの考えを深め、社会の多様な側面を理解する力がますます求められている。このような力を育むためには、生徒たちに探究心をもたせ、自らの興味に基づいて学びを深める経験が重要である。探究心を育むことで、生徒たちが自ら問題を見つけ、その解決にむけてねばり強く考え、社会認識を広めていくことをめざしていきたい。

２　本研究でめざす生徒像

探究心をもって社会認識を深めていく生徒

３　本研究における探究心

本研究では、探究心を「社会的事象や学習課題に興味をもち、自発的に情報を収集し、分析し、理解しようとする態度や行動」と捉えて研究をすすめる。したがって【資料１】のような研究の視点を設定し、てだてを講じ、有効性を検証していきたい。

①興味・関心：新しい知識や経験に対して強い興味を抱く。

②自発性：自らすすんで学び、課題や問題に取り組む意欲がある。

③批判的思考：情報を鵜呑みにせず、分析し、評価する能力をもつ。

④問題解決力：問題を見つけ、その解決方法を考え、実行する能力がある。

⑤持続性：困難な状況でも学び続ける忍耐力とねばり強さがある。

【資料１　探求心をもった学習の視点】

４　ゆたかな学びのためのてだてと単元構想

本研究では、生徒に学びに向かう姿勢（学び方）を身につけさせ、生徒の主体性を最大限に発揮することによって、めざす生徒像に迫っていく。このような学び方を身につけるには、ていねいに学習経験を積む必要があるため、４つの単元を通して、身につけさせたい学習スキルを段階的に鍛えていきたい。

具体的なてだてについては、次章「研究の実際」の中で述べていく。

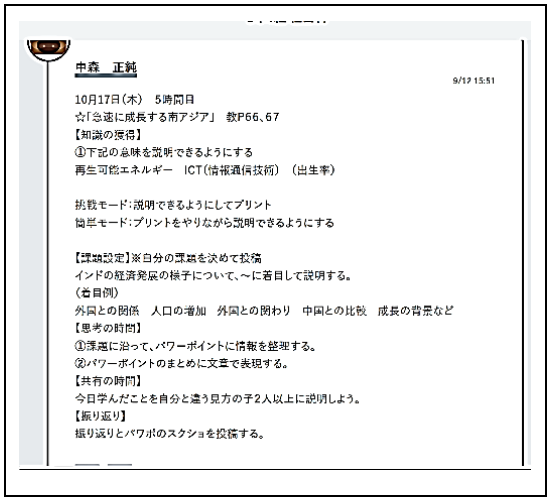
時数	学習活動	ゆたかな学びのためのてだて	特に育みたい力
計３時間	日本列島の誕生と大陸との交流 ①日本列島に住みはじめた人々がどのような生活をしていたのか説明する。 ②弥生時代の様子について、～に着目して説明する。 ③古墳時代の様子について、～に着目して説明する。	（１）ICT の効果的活用	①興味・関心 ②自発性 ⑤持続性

計8時間	古代国家の歩みと東アジア世界 ①聖徳太生徒や蘇我氏がどのような国をめざしたのか、～に着目して説明する。 ②聖徳太生徒の死後の日本の改革について、～に着目して説明する。 ③奈良時代の政治について、～に着目して説明する。 ④律令国家のもとでの暮らしについて、～に着目して説明する。 ⑤奈良時代の文化の特色について、～に着目して説明する。 ⑥平安京に都が移ったころの様子について、～に着目して説明する。 ⑦平安時代の政治について、～に着目して説明する。 ⑧平安時代の貴族の文化について、～に着目して説明する。	（２）教科書を土台とした情報の整理	④問題解決力
計6時間	アジア州―急速な都市の成長と変化― ①アジア州の特色について、～に着目して説明する。 ②アジア NIES の経済発展の様子について、～に着目して説明する。 ③中国の経済発展の様子について、～に着目して説明する。 ④東南アジアの経済発展の様子について、～に着目して説明する。 ⑤南アジアの経済発展の様子について、～に着目して説明する。 ⑥西アジア・中央アジアの経済について、～に着目して説明する。	（３）目的意識をもったかかわり合い	②自発性 ④問題解決力 ⑤持続性
計4時間	ヨーロッパ州―国どうし統合による変化― ①ヨーロッパの特色について、～に着目して説明する。 ②ヨーロッパの統合について、～に着目して説明する。 ③ヨーロッパの環境問題と対策について説明する。 ④ヨーロッパで統合によってどのような変化や課題がみられるのか説明する。	（４）批判的思考を取り入れた分析	③批判的思考

５　研究の実際

（１）ICT の効果的活用～日本列島の誕生と大陸との交流～

タブレット端末を使用し、【資料２】のような指示を出すことで、生徒が興味に応じて課題を設定し、視点をもって追究をすすめた。生徒たちはプレゼンテーションソフトに自分の課題に沿ったまとめをしていき、クラウド上で共有した。これにより、一斉授業では難しい学びの時間的・場所的な制約を取り除き、家庭でも学びを継続できる環境を提供した。


中森　正純　　9/17 15:51

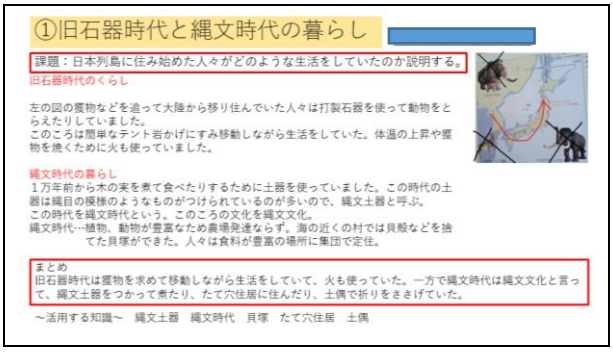
10月17日(木)　5時間目
☆「急速に成長する南アジア」　教P66、67
【知識の獲得】
①下記の意味を説明できるようにする
再生可能エネルギー　ICT(情報通信技術)　(出生率)

挑戦モード:説明できるようにしてプリント
簡単モード:プリントをやりながら説明できるようにする

【課題設定】※自分の課題を決めて投稿
インドの経済発展の様子について、～に着目して説明する。
(着目例)
外国との関係　人口の増加　外国との関わり　中国との比較　成長の背景など
【思考の時間】
①課題に沿って、パワーポイントに情報を整理する。
②パワーポイントのまとめに文章で表現する。
【共有の時間】
今日学んだことを自分と違う見方の子2人以上に説明しよう。
【振り返り】
振り返りとパワポのスクショを投稿する。

【資料２　生徒に提示する授業の流れ（例）】

第１時では全員が同じ課題に挑み、初回は教科書の内容を要約してまとめる生徒が多かった。【資料３】第2・3時では、生徒が自分の視点を決めて追究し、授業時間いっぱい集中して取り組む姿が見られた。本単元の中では、34 人中 12 人の生徒が家庭でも自主的に追究に取り組み、学習への意欲と持続性を示した。この取り組みにより、探究心の視点として設けた①興味・関心、②自発性、⑤持続性の向上が確認された。


①旧石器時代と縄文時代の暮らし

課題：日本列島に住み始めた人々がどのような生活をしていたのか説明する。

旧石器時代のくらし

左の図の獲物などを追って大陸から移り住んでいた人々は打製石器を使って動物をとらえたりしていました。
このころは簡単なテント岩かげにすみ移動しながら生活をしていた。体温の上昇や獲物を焼くために火も使っていました。

縄文時代の暮らし
１万年前から木の実を煮て食べたりするために土器を使っていました。この時代の土器は縄目の模様のようなものがつけられているのが多いので、縄文土器と呼ぶ。
この時代を縄文時代という。このころの文化を縄文文化。
縄文時代…植物、動物が豊富なため農場発達ならず。海の近くの村では貝殻などを捨てた貝塚ができた。人々は食料が豊富の場所に集団で定住。

まとめ
旧石器時代は獲物を求めて移動しながら生活をしていて、火も使っていた。一方で縄文時代は縄文文化と言って、縄文土器をつかって煮たり、たて穴住居に住んだり、土偶で祈りをささげていた。

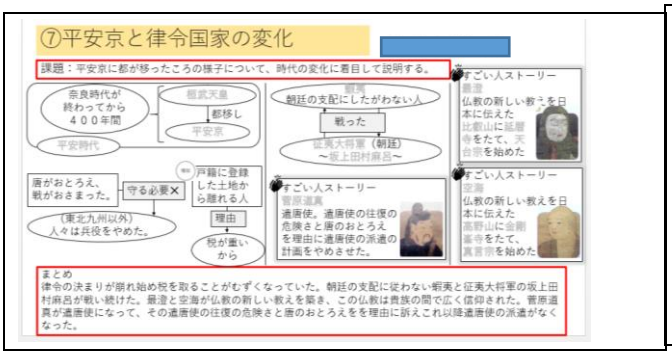
～活用する知識～　縄文土器　縄文時代　貝塚　たて穴住居　土偶

【資料３　初めて教科書の内容をまとめた生徒】

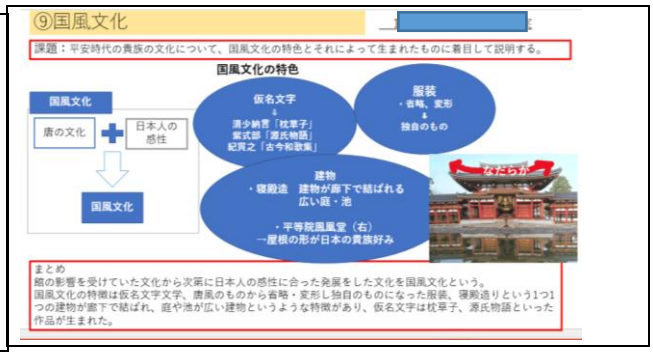
（２）教科書を土台とした情報の整理～古代国家の歩みと東アジア世界～

生徒たちは、教科書から重要な部分を見つけ、線を引いたり要約したりする力を身につけつつある。そこで、社会的事象の関連性や背景、時代の変化を理解するために、表や矢印、項目立てによる整理の方法を学ばせたいと考えた。これにより、生徒たちが社会的事象を多面的・多角的に捉え、歴史認識を深めることができるようにし、探究心の視点として設けた④問題解決力の向上を図っていく。

単元導入では、前単元で社会的事象の関連性や背景、時代の変化を表や矢印、項目立てて整理している生徒を紹介した。その後も毎時間、「前回の神まとめ」として参考になるまとめ方をしている生徒を紹介した。しだいに、紹介された生徒と一緒に課題解決しようとする生徒が増え、社会的事象の背景や関連を整理したり、人物ごとに情報を整理したりする生徒【資料４】や、社会的事象を図式化し、資料を活用したりする生徒【資料５】が増えてきた。課題設定で着目した視点と、整理分析、まとめが一貫していることからも問題解決力が向上していることがわかる。



【資料４　背景や関連を整理し、人物にも着目した生徒】

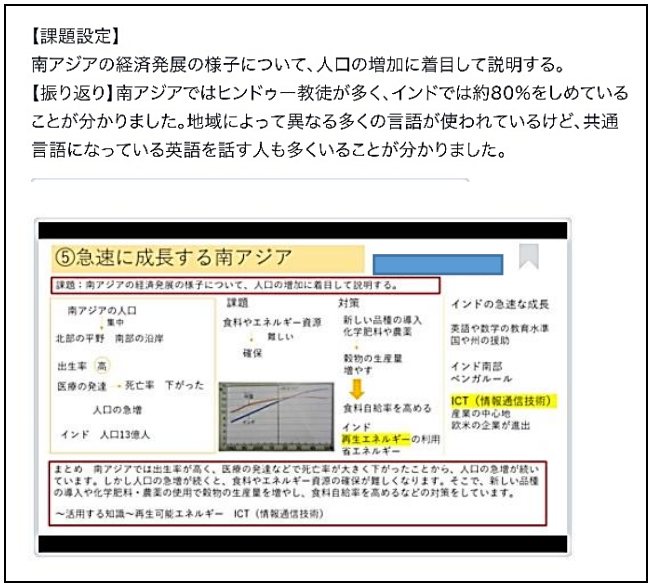


【資料５　図式化したり資料を活用したりした生徒】

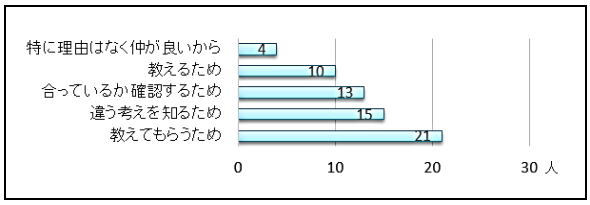
（３）目的意識をもったかかわり合い～アジア州～

前単元で、生徒どうしの良さを取り入れる姿が見られた。そこで、生徒どうしの協働的な学びをすすめるために、明確な目的意識をもって交流することを意識させることにした。整理・分析やまとめの際に他者とのかかわりの場を設け、「なぜその人と学ぶのか」を考えさせ、教えるため、教えてもらうため、アウトプットするため、異なる視点の人と交流して視点を広げるためなどの目的を確認した。

生徒たちは、問題解決にむけて積極的に質問や意見交換を行った。特に交流の中で社会が苦手な生徒が得意な生徒とペアを組み、課題に取り組む姿が多く見られた。普段は自分の考えを記すことが得意でない生徒も、課題に合ったまとめを完成させることができた。まとめた内容を共有するとき間には、自分の視点と異なる視点をもつ生徒との交流を通じて、新たな発見や理解を深める姿も確認された。


【課題設定】
南アジアの経済発展の様子について、人口の増加に着目して説明する。
【振り返り】南アジアではヒンドゥー教徒が多く、インドでは約80%をしめていることが分かりました。地域によって異なる多くの言語が使われているけど、共通言語になっている英語を話す人も多くいることが分かりました。

【資料６　共有するとき間によって視野を広げた生徒の振り返り】



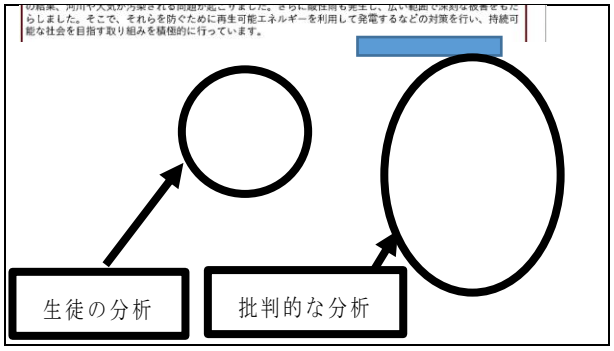
【資料７　交流する際の目的意識（34 人中）】

生徒の振り返り【資料６】に、自分がまとめた視点以外の内容が書かれていることから、目的意識をもった交流が自分の視点を広げ、社会認識を深めるのに効果的であったことがわかる。単元終了後に行ったアンケート結果【資料７】からも生徒たちがおおむね目的意識をもって協働的に学んでいることが確認できた。

このようにして生徒の学習に対する②自発性、④問題解決力、⑤持続性の高まりが見られた。

（４）批判的思考を取り入れた分析～ヨーロッパ州～

これまでの学習で、教科書から情報収集を行い、社会的事象との関連や背景などを意識しながら整理していくことができるようになってきた。社会的事象について自ら学ぶ力がついてきたところで、それぞれの社会的事象について、多面的・多角的に分析する力を高めていくことをめざした。プレゼンテーションソフトにまとめる際には、教科書の内容と自分の考えを区別し、自分で考えたことをオレンジ色の枠線で囲むようにした。分析するにあたっては、学習課題に応じて、「なぜ？」「良さだけでデメリットはないのか？」「立場を変えてもよいことといえるのか」などの視点を与えた。第３時の「持続可能な社会にむけて」では、立場を変えて考えたことで、エコツーリズムによるデメリットについて考える生徒が現れた。【資料８】今回の単元では、毎時間約７割の生徒が分析をすることができていた。さらには、前単元の目的意識をもった交流の成果もあり、分析ができなかった生徒も、共有の時間を通して、友だちの分析を学び、振り返りに記述することができた生徒も多かった。こうして、生徒たちが教科書の内容を深く理解し、自らの視点を広げながら分析する様子が見られ、③批判的思考力の向上につながった。



【資料８　社会的事象を批判的思考でとらえる生徒】

６　成果と課題

ICT の効果的な活用では、どの単元でも 15 人程度、授業時間外でも追究をすすめたり、さらには、学校を欠席した子が家庭でタブレットを確認して学習をすすめたりすることもあった。以上のことからそれぞれの興味に応じた課題を設定し追究することで、自発的な学習をすすめることができ、学びの持続性にもつながることが検証された。

教科書を土台とした情報の整理では、単元導入時には優れた整理方法を紹介し、生徒が社会的事象を整理・分析する力を高めた。しだいに、情報を構造的に捉え、資料を活用する生徒が増加した。結果として、「～について説明する」という学習課題を具体的に解決していくことにつながった。追究の場では、生徒は目的意識をもつて交流することで、かかわりの質が向上した。異なる視点で学ぶ生徒との交流が学びを広げ、視点を広げていく様子も見られた。かかわる相手を自分で見つけようとする自発性の高まりがみられ、学習課題を解決するために、誰とどのように学ぶかを考えて学習していく姿からも、問題解決力の高まりが感じられた。社会的事象を捉える際には、分析する視点を与えることで、批判的な視点で分析することができ、社会的事象を深く理解する力が育まれた。ICT の活用、目的意識をもつた交流、批判的思考の導入により、生徒たちは社会的事象を多面的・多角的に捉え、主体的に学びを深めることができた。課題は、他者とのかかわりの場で、かかわる相手が多くの生徒の中で限定的もしくは、固定化されていくという点である。かかわる相手を毎時間、目的意識をもって選ぶということができる生徒は少なく、多くの生徒がかかわりたい生徒とかかわり、その中で目的を見出すという生徒も少なくない。社会認識をよりいっそう広げていくには、より多くの人とかかわり、学びを広げることが重要であると考える。そのため、目的意識ありきの交流を促すためのてだてを今後考えていきたい。